

ヒースやゴース；イギリスの荒れ地を被う植物

梶原裕二

京都教育大学 理学科 kajiwara@kyokyo-u.ac.jp

キーワード：ヒース、ゴース、文学中の植物

(受付け：2002年5月2日)

スコットランド、ウェールズや英国（イングランド）の郊外には羊の放牧地や麦畑の他に、荒野を目にすることがある。特にイングランド中部の荒れ地（ムアー；moor）は有名な「嵐が丘」（E.プロンテ、永川玲二訳、1979）の舞台にもなり、ヒース（heath）としてよく知られている。

ヒースは「1.針葉の葉をもつ小低木が茂った乾原。2.またはその植物。白、紫、淡紅の小花を密生するハイデソウ（*Calluna vulgaris*）、*Erica* 属がおもな植物である。高層湿原が乾燥して陸化したあとに典型的なものができあがる。小規模なものは高山の森林限界以上の高所によく現れ、日本の高山帯のコケモモなどの群落もヒースにはいる」（ギブニー編、1974）とあるように、灌木に覆われた不毛の大地とその植物をさすようだ。同じような名称として、ヘザー（heather）は、「常緑の灌木（*Calluna vulgaris*）で紫色のベル型の花を咲かせる。荒れ地（moor）や heath に育つ様々な植物の総称である」（Hawkins & Allen, 1991）とあり、ヒースに育つ多くはツツジ科の植物群をさす。最近、日本でも *Erica* の名称で 10 種類ほどの植物がホームセンターで量販されるようになった。図1はブリテン島中西部にあるウェールズのバンゴール郊外の低山で8月中旬に撮影したもので、岩はだにはりつくようにヘザーが生育し、紫色の花を咲かせている。広大な荒れ地ではないが、このようなヘザーに覆われた荒涼とした風景もウェールズ北部の山間には普通に見られる。

荒れた大地を覆う他の植物にゴース（gorse）がある。「ゴースは常緑でとげのある黄色い花を咲かせる *Ulex* 属の灌木である。ヨーロッパの荒れ地に育ち、ファーズ（furze）とも呼ばれる」（Hawkins & Allen, 1991）。日本ではハリエニシダと呼ばれ、同じ仲間のエニシダは日本でも普通に栽培されている。エニシダはもともと地中海沿岸原産の外来種で、江戸初期にはすでに日本に移入され、エニシダの名前の由来は *genista* のオランダ読みからきていると言われている（ギブニー編、1974；北村と村田、1971）。ハリエニシダのほうは日本で広くは栽培されていない。図2はスコットランドのエジンバラ郊外の小高い山頂から市街地を望んだ写真である（6月上旬）。低い丘の斜面が部分的にびっしりと黄色い花で被われている。これがハリエニシダの群落で、一株を拡大したものが図3である。多くのマメ科植

物のように蝶型をした花が葉腋から多数咲いている。それぞれの株の草丈は2mもない。

さて、このような荒れ地を覆う植物が小説にも登場し、良い雰囲気醸し出す。E. ブロンテの「嵐が丘」では、ヒースで覆われた荒れ地という情景があるために、幽閉されたヒロインの解放の困難さや絶望感が伝わってくる。また、「戦争と平和」(トルストイ、米川正夫訳、1984)では、ヒースという荒野があるために、灌木に身を潜め敵の行動を見張る兵士の緊張感が伝わる。図1のような風景でヘザーに身を潜める兵士を想像することも文学の楽しみ方の一つかもしれない。ヒースやヘザーは他の文学作品、例えばワーズワースやジョイスなどにも時折現れる。また、ハリエニシダは、「クマのプーさん」の最初に方に出てくる(デイズニー、1967; 水谷 功、http address は後述)。大好きな蜂蜜を取ろうとして木から落ち、ハリエニシダの灌木(gorse-bush)の中に落ちる部分で、棘だらけになったプーさんを想像すると楽しい。また、有名なイギリスの昔話の「3匹の子豚」にも登場する(石井桃子編訳、1981; 加藤重広、http address は後述)。一番目の子豚はワラの家、二番目の子豚は小枝の家、三番目の子豚は煉瓦の家をつくるのだが、小枝の家がハリエニシダ(furze)でつくられている。筆者は日本風の少しは丈夫な木の家を想像していたので、ワラ、木、煉瓦と順を追って段々と丈夫になり、寓話的でリズム感もあると思っていた。英語で書かれた本でも木の家(wood house)を使用しているものもある。ただ木の家はオオカミの息で吹き飛ばされるほど弱くないはずと少し抵抗を感じていたのだが、この家がハリエニシダの小枝でつくられているのならば話が納得できる。草丈が人ほどのハリエニシダの束では、ムギワラ(straw)の家とさほど強さは変わらない小枝を編んだ家しかできず、昔話の強靱なオオカミならば簡単に息で吹き飛ばしもしよう。おそらく昔話が語られた当時にその場所に普通にあるものを題材にしていたのだろう。

このように、文学や絵画の背景にある自然も理科教育に面白い材料を提供しよう。導入部や発展部に、ある節度をもてば利用可能と思われる。ただ、私たちが実際に現物や現場に触れることはできないので、三匹の子豚のような錯誤が生じる恐れがある。著者が訪問したウェールズやスコットランドに咲いていたヘザーやゴースがその錯誤を解くきっかけになったのだが、そのような錯誤があることもそれはそれで面白い。



図1 岩肌にはりつくように生育するヘザー（8月中旬、著者撮影）



図2 エジンバラ郊外の高台を覆うハリエニシダ群落（6月上旬、著者撮影）



図3 ハリエニシダの株。多くの花が葉腋から咲いている（著者撮影）

参考文献

Hawkins, J.M. & Allen, R. 1991. The Oxford Encyclopedic English Dictionary, Oxford University Press.

石井桃子 編訳 1981. 「イギリスとアイルランドの昔話」、福音館書店.

北村四郎、村田 源 1971. 原色日本植物図鑑木本編 I、保育社.

ディズニー、W. 1967. 「クマのプーさん」講談社ディズニー名作絵話 4、講談社.

トルストイ、L.N. 1984. 「戦争と平和」米川正夫訳、岩波文庫.

フランク B. ギブニー編 1974. ブリタニカ国際大百科事典、TBS-ブリタニカ出版.

ブロンテ、E. 1974. 「嵐が丘」永川玲二訳、集英社文庫.

参考

加藤重広、http://www.hmt.toyama-u.ac.jp/gengo/petit/petit-1_june2000.htm.

水谷 功、<http://www.asahi-net.or.jp/~KA3I-MZTN/pohst.HTML>.